

亡き妻と歩いた北の街 切なく甦る“函館山の竜胆”

映画「アラビアのロレンス」を見た人なら誰でも印象に残る光景があるだろう。主人公のロレンスがアカバからシナイ半島を横断した旅の終わりに、砂漠の端で船の汽笛が聞こえるシーンだ。紺碧の空を背景に、大きな船船が船体の白さもまぶしくスエズ運河をゆったりと進んでいく。砂漠と運河の取り合わせが瞬時に驚きを誘う。近くで見れば何の変哲もない光景でも、自然のいたずらで角度が違えば非凡な構図にもなってしまうのだ。

景色がプリズムのような豊かな変化を見せる仕掛けといえは、坂のある街ほど陰翳に富んだ場所もない。北海道のなかでも小樽と函館は、坂が街並みに独特なアクセントを与える都市といつてよい。そして、高校まで小樽に住んだ私には、通学の往復途中に不思議な楽しみがあった。

坂の町といつても上り切ると、その先には平坦な住宅地が軒を並べている場所もある。朝出かける時に平らな道をずんず

やまうち・まさゆき 東京大大学院総合文化研究科教授（イスラーム史・国際関係史）。1947年、札幌生まれ。北大文学部卒。東大文学博士。カイロ大客員助教授、ハーバード大客員研究員などを経て現職。「瀕死のリヴィアサン」（毎日出版文化賞）、「ラディカル・ヒストリー」（吉野作造賞）など著書多数。2002年に司馬遼太郎賞、06年に紫綬褒章。東京都在住。

山内 昌之



んと歩いていくと、石狩の先にまで広がる蒼穹しか見えない。それが或る所に来ると空の青さが一筋の土の線と切れ、一瞬の間に小樽港や防波堤が見えてくるという仕掛けなのだ。帰りは逆である。背中の港をかえりみながら坂を上れば、見えていた港が決まった場所まで消えてしまうのだ。坂のマジックなのである。

平たい土地が急な坂に変わって海につながるのには、土地の隆起で水深が増した港町なら当然の地形であろう。この風景を見せたくて結婚したばかりの妻をわざわざ札幌から小樽まで連れていったものだ。ライラックが颯爽と咲き誇っていた時期だから、ちょうど五月くらいだったにちがいない。彼女がこの変化を見やすく連想したのは、まさにアラビアのロレンスが砂漠で船のマストを見る驚きの構図だったのがある。確かに、坂や砂漠が逆説のマジックを見せるといふ点では共通していたかもしれない。

余談ながら、二人が一

緒に住んだエジプトにはライラックのように季節の変化を象徴する花もなく、そもそもリラ冷えといった文学を超越するような名表現を算聞にしてアラビア語では聞くこともなかった。

函館の坂は小樽と違って妙に几帳面なところがある。小樽は港から坂がどこにでも自由に延びており、小ぶりながら荒削りな印象を免れない。しかし函館は街の坂がすべて律儀に函館山に向かつて延びているのが印象的であった。この調和美的であった。この調和美的な優美さを与える秘密なのだろうか。

昨年の八月、やや肌寒い日に函館山に登った時はすでに春の爛漫も過ぎ去り、秋の紅葉にはまだ間があった。山麓から限りなくカーブを繰り返す坂の所々に竜胆のように小さな紫の花をつけた草木があった。妻は遠見の間違いかもしれないわねと言いつつ、蝦夷竜胆は湿地にあるはずではないかという話題になった。

頂上にとると刑妻はややはにかんで、遠くの海を見ながら竜胆の花言葉をそっと教えてくれた。群生せず一本ずつ咲くことが多い竜胆の花言葉は「悲しんでいるあなたを支える」というのだった。大事な秘密をこっそりと教えてくれた妻は函館の旅から帰って二日後に忽然と不帰の客となった。何という暗示に富む花言葉だったのであろうか。

不慮の死は思いもかけぬ追憶と重なる。ライラックと小樽の坂から始まった北の地の思い出は、函館の坂と竜胆の花言葉を添えてこれからも甦るに違いない。そういえば、ライラックには友情や青春の思い出につながる花言葉も多いと聞く。五月の札幌はいま、無邪気さや謙遜を含蓄するライラックの花が咲き誇っていることだろう。しかし、彼女と一緒に車で上った臥牛山こと函館山では坂のマジックを発見するゆとりはなく、あの鮮やかな色をつけた小さな花の正体もついに確かめられなかった。

とはいえ私には、いずれ臥牛山の坂から一人で海峡を振り返り遠くに彩りを添える花を見れば、遺言同然に誓った竜胆の花言葉が耳朶に甦ることだけは切なくも確かなのである。